

## イザベラ・バード 47歳で初来日

1878（明治11）年、日本が開港して20年目、天皇制が復活して10年目となった5月、アメリカ上海を経由し横浜に降り立ったバードは、汽車で東京（イギリス公使館）へと向いました、いよいよ日本の旅が始まることになりました。当時の進んだイギリスの近代化は比べものにならないにしろ、東京や横浜、神戸などは近代化されてきており、バードはその姿を見るにつけ、ますます「近代化の波に洗われていない地域がどこかに残っているはず、そういう地域を旅してみたい」という思いが強まってきました。

## 未踏の地への出発

6月10日、3台の人力車を雇い日光へと向かいました。バードの長い旅の始まりです。

日光までは旅行する外国人も多かったが、日光以外は西洋人がまだ足を踏み入れたことのない土地でした。情報収集や買物、旅程の検討などに数日をかけ、日光を出発したのは6月24日でした。

当時、既に日本には「陸運会社」と呼ばれる陸地運送会社があり、東京に本社を置き、各地に支社がありました。陸運会社は、旅行者

や商品を、一定の値段で馬や人足によって運送する仕事です。しかし、馬草の値段、道路状態、借りる馬の数や人足数によって値段が調節され、地方によって相当の違いがあったようです。一方、旅行者が難儀をしたり、遅延したり、法外な値段を吹っつけられたりすることは無く、すばらしくよく運営されていたことから、イザベラ・バードはその会社を利用することにしたのでした。

## 津川の急流下り

阿賀野川

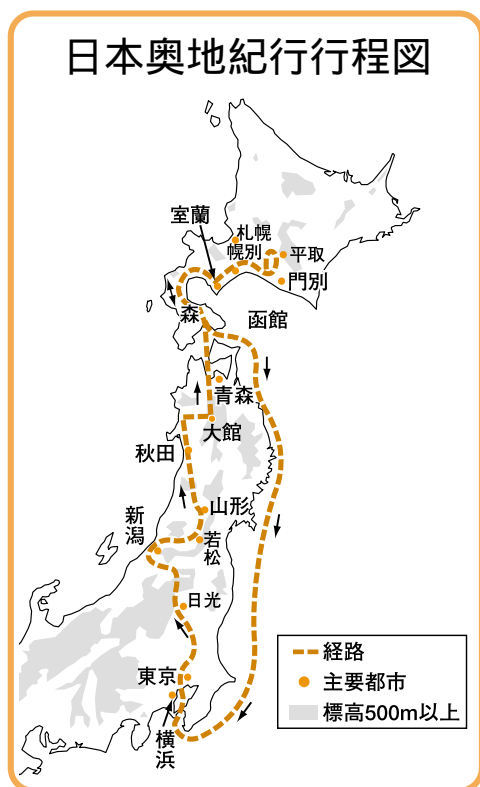
日光から鬼怒川沿いに田島に入り、会津平野を通り会津高田、会津坂下へ。途中「阿賀野川のほとりから一望できる会津の山塊巨峰の眺めは、雄大かつ美しいものであった」と記しています。

津川からは船で新潟へ下りました。「津川の急流下り」は、津川

の美しい景色や旅の変化を楽しみながらの旅だったようです。新潟にはそのころ、イギリス人家族が住まいしており、バードはその家族を訪ねています。1週間の滞在の中で、街並みを散策していた記述があります。当時の新潟を「日本でも最も裕福な国の1つの首都」であると評しています。

## 東洋のアルカディアへ

大勢の見送りを受けながら新潟を出発したバードは、運河から「平底帆船」に乗り信濃川、荒川をさかのぼって加治川を渡り、小国を越え、米沢盆地に抱かれた羽前小松「山形県東置賜郡川西町」へと入ってきたのが7月14日のこと。その美しさと豊かさを「東洋のアルカディア（桃源郷）」と激賞された川西町は「日本奥地紀行」の記者である高梨健吉慶應義塾大名誉



川西町埋蔵文化財資料展示館のイザベラ・バード記念碑

教授の生まれ故郷でもあり、井上ひさし氏（川西町立図書館には、遺筆文庫もある）の故郷でもあります。

バードはこの川西町を「美しさ、勤勉、安楽さに満ちた魅力的な地域である。山に囲まれ明るく輝く松川に灌漑されている。どこを見渡しても豊かで美しい農村である。彫刻を施した梁と重々しい瓦葺きの屋根のある大きな家が、それぞれ自分の屋敷内に建っており、柿やさくらの木の間に見えかくれする。米沢平野は南に繋がる米沢の町があり、北には湯治客の多い温泉場の赤湯があり、まったくエデンの園である。鋤で耕したというより鉛筆で書いたように美しく、実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカディアである」と称賞しています。

実際に、米沢盆地の南陽市と川西町に取材に行きましたが、川西町には「埋蔵文化財資料展示館」があり、小松古墳からの出土品とともにバードの資料が展示され、



ハイジアパーク南陽のイザベラ・バード記念コーナー

記念碑とアルカディアの塔が庭に建てられています。

また、南陽市（赤湯温泉）の多目的レジャー施設「ハイジアパーク南陽」には、イザベラ・バード記念コーナーが常設され、「イザベラ・バードの生きた時代」として、ビクトリア時代の女性ファッションや旅行道具、著書や年表とともに、日本奥地紀行の旅程やバードにアドバイスをした人達も紹介され、バードの見た世界としてその足跡を示す世界地図とともに展示されています。